

看護学生の高齢者へのライフヒストリー・ インタビュー体験による学び —グループ学習後のレポート分析—

熊谷 玲子¹⁾ ・ 川久保悦子¹⁾ ・ 井上 映子¹⁾

I. はじめに

現在、我が国は超高齢化社会に突入し、4人に一人が高齢者という状況である。この状況はさらに進むと考えられ、高齢者を支援する機会はますます増えることが予測される。

高齢者を支援するにあたり、高齢者を理解することが重要である。しかし、近年の核家族化や近隣との関係の希薄化により、若者が高齢者と接する機会は減少しており、高齢者の背景や生きてきた過程を含めた生活者としての理解は難しくなっている。

看護基礎教育における学生の高齢者理解を深める教授方法の研究として、高齢者疑似体験によるものやその人の生きてきた過程、ライフヒストリーを知ることで対象の理解が深まっているなど多数報告²⁾されている。

ライフヒストリー・インタビュー (Life History Interviews 以下、LHI) を教授方法とした先行研究では、LHIによる学びとして、高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性¹⁾やLHIの前後で、高齢者のイメージがネガティブからポジティブなイメージへと変化すること³⁾⁷⁾、などが明らかになっている。また、インタビュー体験が学生に及ぼす教育効果⁹⁾や情意領域の学習効果⁴⁾なども明らかになっている。

しかし、これらの研究は、学習者がLHIを個人で体験し、その体験を他者と共有することなくレポートした内容をLHIの学びとして分析しており¹⁾⁶⁾⁸⁾、グループ学習を活用して、LHIの学びを報告した研究はない。

グループ学習は、テーマについて体験を語り合うことで学びを共有し、理解を深めるために用いられている学習方略であり、基礎看護教育にも頻繁に用いられている。学習者が能動的に学習に関わり、学習者相互のやり取りによって学習を深める効果¹¹⁾、学習意識の変化や経験の意味を振り返る効果⁵⁾¹⁰⁾について述べられており、グループ学習には、学習内容の広がりや深まりが期待できる。また、主体的な学習への導きや対人関係能力の育成にもつながると言われている¹²⁾¹³⁾。

¹⁾ 城西国際大学看護学部看護学科

そこで、本研究は、グループ学習を取り入れたLHI体験による学びを明らかにし、看護学生の老年看護学における高齢者理解を深めるための教授方法を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象者

老年看護学方法論演習を履修した3年次117名のうち、承諾の得られた学生88名を対象とした。

2. LHI演習の概要

1) LHIについて

「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」とし、生まれた時から今までどのように歩んできたか、これからどのような生活を送っていききたいのかをその人らしさが分かるように聴くこととした。

2) 目的

- ① 高齢者が快適で自立した生活を実現できるよう生活の質を向上させ、満足のいく生活を全うしていけるよう支援していくために高齢者の理解を深める。
- ② 過去のその人の生き方・生い立ち・家族関係・職業経験・歴史的時代背景を知ることを通して、その人をそれまでの生きてきた時間の流れのなかで理解する。
- ③ 高齢者が多様な経験や背景を持つ個人であることを理解し、看護実践において、高齢者がこれまで培ってきた価値観や個別性を尊重する態度を養う。
- ④ 援助の対象となる高齢者への人間的理解を深め、その人らしさを発見していくことが個別的な看護につながることの重要性を理解する。

3) 方法

① ライフヒストリーの作成

誕生から現在に至るまでの生活や出来事を聴取し、時系列に整理する。

「生まれた時から今までどのように歩んできたか」

- ② これからどのような生活を送っていききたいか。
- ③ その時の時代背景・社会の出来事を調べる。
- ④ ライフヒストリーの作成を通して、目的に基づいて考察を記述する。

4) 留意点

- ① 祖父母またはそれに準じる身近な高齢者にインタビューする。
- ② 高齢者のコミュニケーション上の特徴を把握して、コミュニケーション方法を工夫する。
- ③ 高齢者の関心のあることや考え方の背景にも関心を寄せて聴く。

- ④ 高齢者自身の語りを尊重していく姿勢が重要である。人間的関心を向ける、インタビュアーと語り手がやりとりをともに楽しむ。

3. カードメソッドを活用したグループ学習の概要

1) 目的

ライフストーリーの作成を通して学んだことを報告しあい、高齢者の心と身体、生活およびそれらを理解する大切さを学ぶ。

2) 方法・進め方

(1) 各自、「ライフストーリー・インタビューを通して学んだこと」を、以下①②の視点で1枚に1つの内容を付箋に記述する。

- ① 「高齢者をどのように理解したか（高齢者の理解（心と身体、生活）」
- ② 「看護にどのようにいかそうと思うか」

(2) グループワーク（図1）

- ① 付箋を模造紙に貼り、同じような内容でかたまり（島）をつくる。
- ② かたまり（島）にその内容に適したネーミング（見出し）を文章として表現する。
- ③ 島と島の関係を関係線で結び、図式化（図解）する。（絵や構造化は自由）

(3) 出来上がった図解をグループごとに発表する。

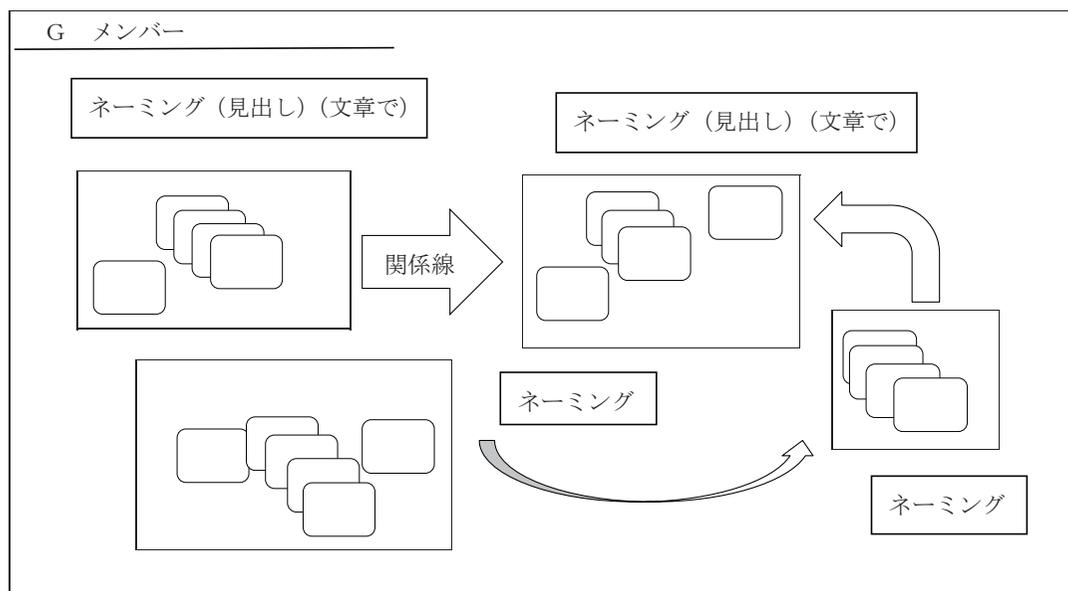


図1 グループワーク

- 3) 「ライフヒストリー・インタビューを通しての学び」について目的に沿って考察するレポート（1500字程度）を課題とした。

4. 分析方法

レポートの全記述内容をデータとした。

- ① 学生が高齢者をどのように理解したか、どのように看護につなげようと思うか、に関する記述について、学生を主語とした一単文を一つの記録単位とした。
- ② 一単文に複数の内容が記述されている場合は分割し、複数の記録単位に整理し、1305記録単位を分析データとした。
- ③ 内容分析の手法を用いて、意味内容の類似性により分類・命名しカテゴリー化した。

5. 倫理的配慮

研究対象となる学生には、研究の主旨と参加・辞退の保証（承諾するか否かにかかわらず個人が不利益を被ることはないこと）、匿名性の保持、情報管理、結果の公表方法等の内容を口頭と文書で説明した。

本研究は、城西国際大学研究倫理委員会の承認を得た。（承認番号 31N170013）

Ⅲ. 結果

1. 「ライフヒストリー・インタビューを通しての学び」レポートの記述内容の分析から表 1 に示す通り、【高齢者の心身の多様性への理解】、【高齢者看護の基本】、【LHIによる高齢者の自尊感情促進への効果】、【LHIによる専門職者としての意識への効果】の4つのカテゴリーが生成された。なお、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを『 』コード例を「 」で示す。

1) 【高齢者の心身の多様性への理解】

このカテゴリーは、『自身の高齢者のイメージが変化する』、『希望と不安の両側面をもっている』、『周囲・社会とのつながりを大切にしている』、『責任感・自立心がある』、『老化に伴う変化を自覚している』という5つのサブカテゴリーから構成された。学生は、高齢者の「経験が価値観・行動に影響していること」や「生きがいをもって充実した生活を送っている」ことを知り、これまで抱いていた『自身の高齢者のイメージが変化する』という体験をした。高齢者は「誇りや夢がある」、「周囲・将来に関する不安をもつ」という『希望と不安の両側面をもっている』こと、「家族を大切にしている」、「人との関わりが好き」という『周囲・社会とのつながりを大切にしている』ことを理解していた。また、高齢者には「健康意識が高く自立心がある」、「頼りたくない」という『責任感・自立心がある』こと、「身体の変化を感じながら暮らしている」、「老化に伴い気持ちに変化する」という『老化に伴う変化を自覚している』ことに気づき、学生は【高齢者の心身の多様性への理解】

をしていた。

2) 【高齢者看護の基本】

このカテゴリーは、『その人らしさを叶えるために強みを活かす』、『各人の QOL 向上を目指してニーズに応える』、『尊厳を尊重する』、『交流の場をつくる』、『生活史を活用する』という 5 つのサブカテゴリーから構成された。学生は、「その人らしく望みを叶えられるよう支援する」、「強みを見出す」という『その人らしさを叶えるために強みを活かす』こと、「個別性をいかす」、「QOL の向上をめざす」という『各人の QOL 向上を目指してニーズに応える』こと、「意思や価値観を尊重する」、「尊敬・尊重する」という『尊厳を尊重する』ことを看護に活かそうと考えていた。また、「家族・地域が看護のポイントとなる」、「コミュニケーションの機会をつくる」という『交流の場をつくる』こと、「生活史を知ることが個別性の理解につながる」、「人生背景を幅広く理解する」という『生活史を活用する』こと、つまり学生は【高齢者看護の基本】を学んでいた。

3) 【LHI による高齢者の自尊感情促進への効果】

このカテゴリーは、『回想により自尊感情をもつ』、『人生を振り返る機会となる』、『傾聴が会話を促進させる』という 3 つのサブカテゴリーから構成された。高齢者は、「生き生きと話す」ことが多く、「昔のことを誇りに思っている」と感じ、『回想により自尊感情をもつ』機会となっていた。また、「コミュニケーションにより自己肯定感を感じている」、「会話が人生の振り返りになる」という『人生を振り返る機会となる』こと、「高齢者は話し続ける」、「昔の出来事を楽しそうに話す」という『傾聴が会話を促進させる』ことに気づき、学生は【LHI による高齢者の自尊感情促進への効果】を学んでいた。

4) 【LHI による専門職者としての意識への効果】

このカテゴリーは、『専門職者としての意識が高まる』、『長い人生に敬意をはらう』、『学習者としての取り組みに意欲をもたらす』、『関係性の構築に活用できる』、『人を大切に思う感情がうまれる』、『生活の豊かさを実感する』という 6 つのサブカテゴリーから構成された。学生は、「LHI を活用してより良い看護を提供したい」、LHI を「看護職者に必要なコミュニケーション方法として考える」という LHI により、『専門職者としての意識が高まる』良い影響をうけていた。また、「時代背景を知ることによって尊敬の念を抱く」、「年齢を超えて一人の人間としてかわる」という『長い人生に敬意をはらう』という気持ちを抱いていた。さらに、「インタビューの際の聴き方・姿勢として参考になる」、「今後の実習や看護に活用できる」という『学習者としての取り組みに意欲をもたらす』ことや『関係づくりになる』、「会話から信頼を築く」という『関係性の構築に活用できる』ことを学んでいた。「身近な人への思いやりの気持ちを抱く」、「祖父母と交流を持ち続けたい」という『人を大切に思う感情がうまれる』こと、現代の「生活の豊かさを実感する」、「今後の生活を考慮する」という『生活の豊かさを実感する』ことに気づき、学生は LHI の体験を通して、【LHI による専門職者としての意識への効果】を実感していた。

表1 LHIを通しての学びの内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
1. 高齢者の心身の多様性への理解	①自身の高齢者のイメージが変化する	・経験が価値観・行動に影響していることを知った
		・生きがいをもって充実した生活を送っていることを知った
		・生活史の中に強みがあることに気づいた
		・個別性・多様性があることを知った
		・人生経験が豊富であることに気づいた
	②希望と不安の両側面をもっている	・誇りや夢がある
		・周囲・将来に関する不安をもつ
	③周囲・社会とのつながりを大切にしている	・家族を大切にしている
		・他者・地域とのつながりがある
		・人との関わりが好き
	④責任感・自立心がある	・健康意識が高く自立心がある
		・頼りたくない
	⑤老化に伴う変化を自覚している	・身体の変化を感じながら暮らしている
		・老化に伴い気持ちに変化する
	2. 高齢者看護の基本	①その人らしさを叶えるために強みを活かす
・強みを見出す		
・できることを見つけて援助する		
②各人の QOL 向上を目指してニーズに応える		・個別性をいかす
		・QOL の向上をめざす
③尊厳を尊重する		・意思や価値観を尊重する
		・尊敬・尊重する
④交流の場をつくる		・家族・地域が看護のポイントとなる
		・コミュニケーションの機会をつくる
⑤生活史を活用する		・生活史を知ることが個別性の理解につながる
		・人生背景を幅広く理解する

カテゴリー	サブカテゴリー	コード例
3. LHIによる高齢者の自尊感情促進への効果	①回想により自尊感情をもつ	・生き生きと話す
		・昔のことを誇りに思っている
	②人生を振り返る機会となる	・コミュニケーションにより自己肯定感を感じている
		・会話が人生の振り返りになる
	③傾聴が会話を促進させる	・高齢者は話し続ける
		・昔の出来事を楽しそうに話す
4. LHIによる専門職者としての意識への効果	①専門職者としての意識が高まる	・LHIを活用してより良い看護を提供したい
		・看護職者に必要なコミュニケーション方法として考える
	②長い人生に敬意を払う	・時代背景を知ることによって尊敬の念を抱く
		・年齢を超えて一人の人間としてかかわる
		・辛い時代を生きてきたことを尊敬する
	③学習者としての取り組みに意欲をもたらす	・インタビューの際の聴き方・姿勢として参考になる
		・今後の実習や看護に活用できる
	④関係性の構築に活用できる	・関係づくりになる
		・会話から信頼を築く
	⑤人を大切に思う感情がうまれる	・身近な人への思いやりの気持ちを抱く
		・祖父母と交流を持ち続けたい
		・祖父母のできることを見つけて援助したい
	⑥生活の豊かさを実感する	・生活の豊かさを実感する
		・今後の生活を考慮する

IV. 考 察

1. グループ学習を取り入れたLHI 演習の学び

本研究で、看護学生の高齢者へのライフストーリー・インタビュー体験による学びとして、【高齢者の心身の多様性への理解】、【高齢者看護の基本】、【LHIによる高齢者の自尊感情促進への効果】、【LHIによる専門職者としての意識への効果】が明らかとなった。

1) 【高齢者の心身の多様性への理解】

学生は、誕生から現在に至るまでの生活や出来事を聴取し、生まれた時から今までどのように歩んできたかを知ることで、その時々時代の背景と合わせて理解し、「人生経験が豊富であることに気づいた」ことから、その経験と現在の祖父母の行動や考え方をつなげ、「経験が価値観・行動に影響していることを知った」と考える。現在の生活や今後への思いを聴くことで、高齢者には「他者・地域とのつながりがある」と知り、それが、「生きがいをもって充実した生活を送っていることを知った」ことから、『周囲・社会とのつながりを大切にしている』と気づいた。高齢者のイメージについては、授業中の学生の反応から、学生が全体的にネガティブなイメージを持っていることを感じており、また、LHI 前の学生のレポートによりネガティブなイメージを持っていた学生が大半を占めていたことが報告⁸⁾されている。このことは、身近な祖父母が、健康的な生活を送っている様子を感じながらも高齢者のイメージにおいては、ステレオタイプにとらえているという傾向ではないかと考える。LHI により、「生活史の中に強みがあることに気づいた」、「人生経験が豊富であることに気づいた」ことにより、今まで抱いていた高齢者へのネガティブなイメージから、「生きがいをもって充実した生活を送っている」などの『自身の高齢者のイメージが変化する』体験をした。この高齢者に抱くイメージは看護の質に影響するといわれており¹⁴⁾、肯定的なイメージに変化することは、看護を学び始めた学生にとって望ましいことである。また、高齢者は、「周囲・将来に関する不安をもつ」としながらも、「誇りや夢がある」生活を送っており、『希望と不安の両側面をもっている』ことや、「身体の変化を感じながら暮らしている」ことを学生は理解し、『老化に伴う変化を自覚している』ことや、健康のための行動を行い「健康意識が高く自立心がある」など高齢者の思いを広く多面的に理解することができ、高齢者の理解の深まりを感じている。

以上のことから、学生はグループ学習で、LHI 体験の学びを共有することによって、高齢者に「個性・多様性があること」を気づき、その中から、高齢者の特徴とする共通性も捉え【高齢者の心身の多様性への理解】が深まると考える。

2) 【高齢者看護の基本】

学生は、LHI の中で現在の生活に至る過程での身体・心理・社会面での力強さを感じ、「生活史の中に強みがあることに気づいた」ことから、高齢者個々の『その人らしさを叶えるために強みを活かす』看護、「その人らしく望みを叶えられるよう支援する」看護をしたいと考えている。授業で学んだ高齢者のもてる力や強みを活かす工夫などから想起され導き出されたと推察する。また、個々の高齢者に「誇りや夢がある」ことを知り、「個性を活かす」といった『各人の QOL 向上を目指してニーズに応える』こと、人生の先輩であり、厳しい時代を生きてきたという尊敬の念をも込めて、『尊厳を尊重する』ことの必要性を感じている。高齢者が『周囲・社会とのつながりを大切にしている』ことから、社会とつながりをもつためには、他者との交流が保たれるような「コミュニケーションの機

会をつくる」必要性を感じ、『交流の場をつくる』ことが援助の大切なポイントであることに気づいたと考える。

以上のことから、LHI 体験を通して理解したことを看護につなげて考え、グループで共有することで、【高齢者看護の基本】を考えることができた。

3) 【LHIによる高齢者の自尊感情促進への効果】

学生は、高齢者に直接インタビューすることによる語り手と聞き手の相互作用における効果を得ることができたと考える。高齢者は、回想することで人生を振り返り、「生き生きと話す」様子や「昔のことを誇りに思っている」ことから、ポジティブな面が想起され、自己肯定感をひき出し、『回想により自尊感情をもつ』ことができた。また、「昔の出来事を楽しそうに話す」様子から、高齢者にとって『傾聴が会話を促進させる』と感じ、自分の意思などを他者に話すことでの安心感にもつながったのではないかと考える。

以上のことから、高齢者へのインタビューという体験は、高齢者の自己肯定感につながり、【LHIによる高齢者の自尊感情促進への効果】が期待できる。

4) 【LHIによる専門職者としての意識への効果】

学生は、「時代背景を知ることで尊敬の念を抱く」と共に人間としての重みを感じ、「年齢を超えて一人の人間としてかかわる」ことや『長い人生に敬意をはらう』という気持ちを抱いたと考える。また、身近な人へ何かしてあげたいなどの「身近な人への思いやりの気持ちを抱く」という感情から『人を大切に思う感情がうまれる』という情意面にも影響を与えていることがわかる。これらは、高齢者への看護において重要な高齢者の尊厳を守ることや人への関わりを大事にし、必要な時には手を差し伸べるという支援の気持ちを含む大切な感情ではないだろうか。高齢者に直接インタビューすることによる語り手と聞き手の相互作用における効果のもう一側面として、高齢者の思いを傾聴することで「昔の出来事を楽しそうに話す」様子から、高齢者との「関係づくりになる」ことを感じ、『関係性の構築に活用できる』ことに気づいたと考える。

また、高齢者の生きてきた時代と物質の豊富な恵まれた現代と比べ「生活の豊かさを実感する」気持ちを抱き、今後の自身の生活へも意識が向けられたと考える。

以上のことから、LHI 体験を通して学生自身が抱いた思いは、看護職を目指す者として貴重であり、【LHIによる専門職者としての意識への効果】が期待できる。

2. グループ学習を取り入れた演習方法

LHI の学習効果は先行研究において報告されており¹⁾⁶⁾⁸⁾、高齢者理解の演習方法として多く取り入れられている。今回、老年看護学方法論演習の授業における課題「身近な高齢者にLHIを行い、LHIを通して学んだこと」について、グループ学習を取り入れ、カードメソッドを活用した演習を展開した。グループ学習の効果として、知識の幅の広がり、多角的な議論や深まり¹²⁾がある。グループワーク前後の短期的な学習効果についての研究から、学生の

事例の捉え方に関する視野の広がり効果を報告しているもの¹⁰⁾もある。個々で知り得た高齢者の学びは、個人であるその人の生活史であって、高齢者を理解するうえでは一部分でしかない。様々な高齢者を看護するに当たり、高齢者を画一的に捉えるのではなく、多様性があり個別的で一人として同じ人はいないということを理解するには、一人の高齢者のLHIだけでなく、LHIによる学びを学生間で共有する場が必要であると考え。『自身の高齢者のイメージが変化する』体験や「個別性・多様性があることを知った」、『希望と不安の両側面をもつ』、「生活史を知ることが個別性の理解につながる」などは、他の学生によるLHIの学びを共有した結果とも考えられる。

また、カードメソッドは、お互いの体験を振り返り、体験のなかに含まれている曖昧な「気づき」や「思い」をカードに記述し、語り合うことを通して看護活動の根拠や看護現象を明確にしていくという一連のプロセスをたどる⁵⁾ことができる。カードメソッドの教育効果として「(1) 言語化する能力を育てる。(2) 体験を語る力を育てる。(3) 体験を傾聴する力を育てる。(4) 体験の意味を探求する力を育てる。(5) 体験と体験をつなぎ統合する力を育てる。(6) 直感的に推論する感性を育てる。(7) 学習意欲が喚起され主体性を育てる。(8) 対人関係能力が高まりグループにおける信頼感が育つ。(9) 組織的に「知」をプロデュースする協同学習能力が身につく。(10) 創造的に学びの場づくりができる。(11) 教師が学生から学び、学生とともに成長する。」⁵⁾がある。

今回のカードメソッドを活用した演習は、LHI体験を通して、わかったこと感じたことを各自がカードに記述し、グループで内容を検討することで、学生は自然に話し合いに参加しており、言語化する力も養われ、相互に協力しあい課題を仕上げる活動を行っていた。

したがって、LHI演習におけるカードメソッドの活用は、学生の高齢者理解を深化させ、さらに主体性や対人関係能力を高め、同じ内容のものをまとめ、ネーミングすることによる情報の統合力や創造力を育む学習方略である。

V. 結 論

グループ学習を通じた、看護学生の高齢者へのライフヒストリー・インタビュー体験による学びは、【高齢者の心身の多様性への理解】、【高齢者看護の基本】、【LHIによる高齢者の自尊感情促進への効果】、【LHIによる専門職者としての意識への効果】であることが明らかになり、LHI演習にカードメソッドを活用することによって、学生の主体性、対人関係能力、情報の統合力、創造力を育成できることが示唆された。

VI. 本研究の限界と課題

今回は、看護学生の高齢者へのLHI体験による学びをグループ学習後のレポート分析から明らかにしたものであるが、グループ学習前の学びとの比較はできていない。グループ学習後の学びとしてグループ学習前との違いを明らかにすることが今後の課題と考える。

参考文献

- 1) 尾崎章子, 斎藤美華, 東海林志保 (2016) : 老年看護学教育にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果, 東北大医保健学科紀要 25(1) : 39-45
- 2) 樋口友紀, 福島晶子, 竹渕由恵, 他 (2013) : 看護基礎教育課程における看護学生の高齢者理解に関する研究の動向—2002年~2011年に発表された国内研究に焦点をあてて—群馬県立県民健康科学大学紀要 第8巻 89-101
- 3) 松田武美, 福田峰子, 梅田奈歩, 他 (2015) 看護学生・高齢者世代間交流による相互学習の取り組みの効果 ライフヒストリーインタビューによる傾聴体験を通して 生命健康科学研究所紀要 Vol.12 54-61
- 4) 櫻井清美, 尾島喜代美, (2014) : ライフヒストリーインタビューを在宅高齢者に行った看護学生の思い —情意領域の学習効果— 日本看護学会論文集 地域看護 192-195
- 5) 安酸史子 (2015) : 経験型実習教育 看護師をはぐくむ理論と実践 : 医学書院 60-68
- 6) 小曾木加奈子, 安藤 恵 (2010) : 看護学生における高齢者理解—ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析—, 教育医学, 55(3), 283-292
- 7) 小笠原真理, 谷本真理子, 正木治恵 (2010) : 高齢者の過去の背景を活かした看護を通して得た実践的知識 千葉看会誌 16(1) 53-60
- 8) 成松玉委 (2015) : ライフヒストリー・インタビューによる看護学生の学び—高齢者のイメージに注目して, 17-29
- 9) 坂倉恵美子 (1998) : インタビュー体験が学生に及ぼす教育効果—老人看護学授業方法の検討— 北海道大学医療技術短期大学部紀要 11、79-84
- 10) 種恵理子, 大野佳子, 岡田由美子, 他 (2016) : 看護学部教育グループ学習評価の一事例 : 認知症事例検討グループワーク学習を対象とするテキストマイニング法短期評価 城西国際大学紀要 24 (8) 19-35
- 11) 高橋寿夫 (2008) : 授業の活性化に向けて—グループによる学習参加型授業の実践的考察— 関西大学外国語教育フォーラム 第7号 23-34
- 12) 新井和弘, 板倉杏介 (2013) : グループ学習入門 学びあう場づくりの技法 慶應義塾大学出版会 10-13
- 13) 伊藤良子 (2007) : グループワークによる対話能力の育成—グループワーク「健康教育講座を創る

う」を通して— 京都市立看護短期大学紀要 第 32 号 141—144

- 14) 滝川由美子, 吉本知恵, 横川絹恵 (1999) : 看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の
授業前・後の比較— 香川県立医療短期大学紀要 第 1 巻 51—60